

## 時代祭り

中塚 裕子

笛の音が聞えて来る。どこかで聞いたようなリズムに、いつとなく聞き知っている、錦の御旗に白鉢巻の維新勤王隊が歩調を合せて進んで来た。都大路をねり歩く延暦から明治維新までの装俗をまねての風俗行列は、次々と朱の大鳥居をくぐる。

新春の祝詞奏上の徳川上使上落は、毛槍、挟箱の所作も面白く、大名行列の面影を伝えている。檳榔毛唐庇の牛車は豊公時代の音もかくやと重々しく進み、大鎧、胴着、腹当ての武者は楠公参詣の行列で戦乱の世をあらわし、華やかなりし王朝の、又官や殿上人、そして、延暦武文官は、坂上田村麻呂が大極殿に参進する様を伝えている。

現代を背景に歴史はさかのぼられ、行列

は続く。

京都の重要な年中行事の一つであるこの祭は、もとより平安神官の神事である。もの見高い観光客を集めて近年とみに盛んなこの行事も、その起源は以外と新しい。明治二十八年（一八九五年）平安遷都一千年祭に恒武天皇を御祭神とする平安神官が創立され、遷都の十月二十二日を佳日と定め、この時より始まったという。

京の十月は秋色をかくわせ、色さまざまの時代衣裳は美しく昔日の面影をただよわせる。

明治の御維新により、都は東京に遷り、この時より近代日本の歴史が始まった。文化の厚い層に支えられた京の人々にとつて、一千年余りも続いた日本の中心が、武骨な東国に移されるのを、心よしとしなかつたのか。

在野の精神は、琵琶湖から疎水を導き、水利と共に電気を起こし、燈をともし、日本で最初に電車を走らせるなど、近代化につとめ——一方、文明をもってしても、どうする事も出来ぬ歴史の重みを時代行列に

顕彰したという。

一時とだえていたこの祭は、戦争後の昭和二十五年に再興され、この時から、男ばかりの無粋な行列に女性が加わり、一段と華を添えた。

紫式部や清少納言が通る。長い漆理の髪、色あでやかな十二単、観る人々を魅了こそすれ、いさか近寄りがたい冷めたさを感じさせる。むしろなんのくったくもなく大人の子に引かれ、もう飽きてしまったのか、時々よそみをしている童のふりわけ髪が可愛く、観る者と心通じる。

又、行列の間、どれだけの見物人が待機していたか、あの人達を呼び集めた力は、この行列のどこにあるのか。のんびりと行列がやってくるまでの時間を、お弁当をひろげ、世間話や昔話を花をさかせて、心待ちにしている人達、何となしに、ほほえましく、心なごませてくれるものもある。私のすぐ近くで見えていたお爺さん、古きよき昔をそのひたいに浮かべてか、道にすわりこんで、くいているようにみつめていたのは、心なしかあわれでさえあった。

お祭りさわぎと云う言葉があるが、様々な行事の度に勢力的に集まって来る人々、この人達のエネルギーが万国博にも集まったのか、若しこれが宗教的な行事であるならば、人々のうちに燃え上る信仰の炎をみることも出来るだろうが。然しそこにあるものは、御老令のいさましい姿や、見物人の目をきにしてか、アルバイト学生の何となく虚無的で、それでいて、恥かしげな足取りでしかないのである。しかも、市内電車<sup>トキ</sup>の走る舗装道路にはいささか不釣合なこの行列、なにか滑稽さを心に残さないでもなかった。

折り目正しい四季、こまやかな自然、そして、現代に失われゆくロマンを未だ秘めて、京は美しい町である。美しさの故に人々は、その外相<sup>げそう</sup>に魅入られ満足してしまふ。

笛の音は遠ざかってしまった。古代にくり広げられた時代絵巻、もともと様式化されたものとは云へ、私共に、日本の文化の組成や年輪を思い起こさせてくれる。

大極殿に模した殿舎に行列が消え、群衆

のさざめきの中に時代祭りは終った。粟田山の緑と朱の大鳥居は、祭りの騒然も知らぬげに夕陽に美しく映るのである。此

の祭りは、(国二)

（以下は非常に小さい文字で書かれた、ほぼ読み取れない文章が続く）

（以下は非常に小さい文字で書かれた、ほぼ読み取れない文章が続く）